

嘉靖金欄手瓶の意匠

中 川 千 咲

いわゆる嘉靖金欄手はその数に於て、また優品の存することに於て、

わが国は宝庫といわれている。仙蓋瓶・碗・花生・鉢・壺・香炉から馬上盃・文房具などいろいろあつて、絢爛目をたのしませ、殊に仙蓋瓶と碗には優れたものがあるが、また瓶も華麗なうちに堂々たる趣があつて注目される。今その中で最も大きい優作を図版として掲載する機を得たので、瓶を中心として金欄手の意匠について少し見てみようと思う。

世に賞せられている金欄手は明の嘉靖時代に景德鎮窯で焼かれたものとされている。嘉靖の製であることは、金欄手中には底裏に染付で、二重圈内に「大明嘉靖年製」あるいは「大明嘉靖年製」の銘のあるものはいくつかあり、またその器形・作行・文様からしても明の色絵の最盛期とされる嘉靖に於てはじめて為し得るものと見られるからである。また景德鎮窯の産であることは、先の款識が二重圏で囲まれていることは官窯の製であることを示しているし、明代の官窯は景德鎮窯だけであつたのであるから、それは充分考えられるし、素地、作行からいっても景德鎮と鑑せられるるのであつて、ここでもそれらは首肯すべき説として

従つておく。^{註一}

今本題の意匠を見るに當つて、大きな関連をもつ、嘉靖磁の意匠というものの様相について見ておこうと思う。

嘉靖は治世四五年間、景德鎮でも御器廠の窯数五八座に達し、官・民窯の繁栄目ざましく、明磁の最盛期ともいわれている。その染付は回青によつて鮮やかな董紫となり、五彩は華麗に、また雜彩（黄地紅彩・黄地染付・紅地綠彩・黄地紫彩・紅地染付・紫地黄彩など）の如きいろいろな絵技法を施したもの、更に豪華な金欄手など造られ、器形・作風にも一段の変化が示され、それにともなつて裝飾法も多岐多様となつた。これらの裝飾については従来技法、材料の面、あるいは模様の種類、意味などを解くのに重点が置かれ、裝飾という観点から扱つたものは無いようであるが、ここでは意匠構成上の問題が重要でもあるので、大まかなながら分類を試みることにした。一応器種別に見ると概略次のようである。

壺では、A、幾何学文様などの附随文様を施さず、器物全体を雲竜などで飾つたもの、B、頭に幾何学文・鋸齒文・肩に幾何学文・唐草文、あるいは蓮弁文のいずれか、裾に蓮弁文・如意頭文、あるいは葉形文の

いずれかを施し、主要文様としての胴には、それぞれ故事物語(挿図1)・雲竜・雲鶴(挿図2)・唐草・樹木(挿図3)・魚藻(挿図4)などを表わした類がある。

Aの如く、ほとんど附随文様を附せず、器全体を雲竜文などで飾ったものは宋代に優れた例があるし、元・明初・宣徳・嘉靖に行われ、その間表現法などに変化はあっても、装飾法としては従来のを踏襲し

挿図4 五彩魚藻文壺「大明嘉靖年製」銘
白鶴美術館

挿図1 嘉靖五彩武戲図有蓋壺
白鶴美術館

挿図5 元青花細柳營図壺

挿図2 色絵雲鶴八宝文壺「大明嘉靖年製」銘

挿図6 明初青花三国志図壺

挿図3 色絵草花文方壺「大明嘉靖年製」銘

たものといえる。

Bのうち、胴に物語、故事の類を現わし、上下部に附随文様として幾何文様・唐草文・蓮弁文を施す方法は、既に元の染付の壺に見られ、頭

嘉靖金欄手瓶の意匠

に波頭文、肩に牡丹唐草、胴に元曲の一つを描き、裾に蓮弁文を施している（挿図5）。明初の壺に、頭にも幾何文様、肩には幾何文様の地に窓を設けて草花文を入れ、胴には三国志演義の一つを表わし、裾を波頭文



挿図10 明色絵蓮池水禽文皿



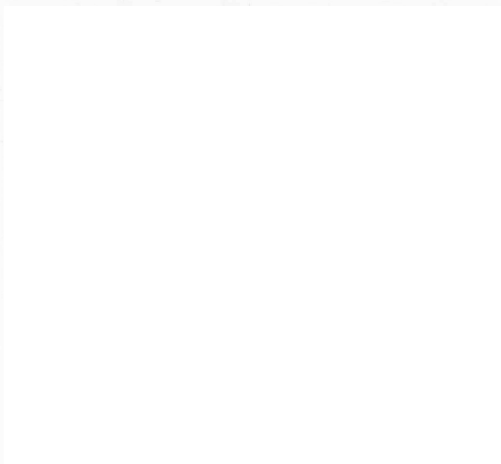
挿図11 明五彩唐草文鉢「大明宣德年製」銘
大和文華館



挿図12 色絵花蝶竜文角皿「大明嘉靖年製」銘



挿図7 明五彩唐子図壺 東京国立博物館



挿図8 元青花魚藻文壺 同上



挿図9 明青花雲鶴文梅瓶

7の如く、頭に瓔珞文、肩に幾何文様と蓮華、胴に唐子図、裾に蓮弁文を描き、赤絵で華やかに飾ったものが見られる。従って挿図1の嘉靖の壺の装飾も宣徳頃のもを更に複雑、華やかに飾ったもので、元代よりの一連の装飾法であると解してよいと思う。

また魚藻文のものは、附随文様に違いはあるにしても、元あるいは明初といわれる青花の壺にやはり胴一様に魚藻文を表わしたのがあり(挿図8)その流れと見られよう。

次に頭・肩・裾は一応前者と同じく幾何学文様や、唐草・蓮弁類で飾り、胴に樹木とか、雲竜・唐草を描いたものがあるが、宋代の磁州窯系のものには竜・唐草文様のが盛んに行われ、優れた作品も遺っており、元、明初から成化頃にも釉裏紅・青花・豆彩などで同じようなものがある。嘉靖の遺例では瓶などは別として、いわゆる丸形の壺より方壺によく見られるのである。大体方壺という形は嘉靖に生れたものと思われる

挿図13 黄地紅彩草花文角皿「大明嘉靖年」銘

で飾ったものがある。これは頭・肩に幾何文様を用い複雑化し、元の壺では頭にあつた波頭文を裾に廻らすといった変化はあるが、元代よりの装飾法を承け継いでいるのは明らかである(挿図6)。

挿図14 青花松竹梅文文房具「大明宣徳年製」銘 掬粹巧芸館

おり、そこに嘉靖の壺などの装飾法に於ける一つの新しい姿が求められるのである。

瓶には金襴手はしばらく措くとして、全体に牡丹唐草をめぐらしたもののや、頭に葉形、肩に雲形と一種の瓔珞文、胴に雲鶴、裾に牡丹唐草と蓮弁を飾ったような複雑な類がある(挿図9)。これらは元代の青花、釉裏紅のものに見られる装飾様式で、若干の変化や複雑化はあるにしても新様とはいいい得ないものであろう。

皿には見込一杯に竜・唐草文を描いた類があり、これらは従来からのモチーフ、装飾法を承け継いでいることはいうまでもない。また見込に蓮池文様、縁に簡単な幾何学文様を施した皿があり(挿図10)、縁の装飾法は宣徳頃の鉢の内縁に見られるが(挿図11)、見込画は題材的には嘉靖

が、その特異な形に対する必然性からでもあろう、丸壺の場合と違って各面を一つの装飾単位とし、四角の平面にはまるよう構図し、描かれているのである。例えば一つの面に、寿石を中心一本の樹木を上げるといった従来見ないような図柄・扱いをしたり(挿図3)、竜も壺では器体を取りまくように描いたのを、皿にしばしば見る如く、縦に表わしたりしているのであって、モチーフなどに従来と同じものがあるにしても、その表現、扱い方は異な

以前からありながら、その表現には異った行方をしている。他に見込に玉取獅子・寿字雲鶴文などを飾ったものがあるが、これらは題材的に見て嘉靖に生れたものといえよう。

別に角皿があり、見込に寿石を中心に花卉を拵げ、縁に簡単な幾何学文様に窓を設けて竜など入れた色絵や（挿図12）、見込に寿石に靈芝・花卉を表わした黄地紅彩などの優れた作がある（挿図13）。この前者の縁文様のような幾何文様地に窓を設ける装飾法は明初青花の壺の肩や（挿図6）、宣徳の箱形をした青花の文具の側面などにも見られ（挿図14）、特に新しい様式とはいえぬかも知れぬが、見込文様の表現には後の見込画と共に、方壺の場合と共通するものがあり、やはり新しい表現と見なされるのである。

鉢では丸または角に作った外側に鳳凰・唐草・唐子などを黄緑釉・紅地緑彩といった雑彩や三彩の諸技で表わしたものがあるが、技術的には新しい試みながら、題材、装飾法としては以前からのものに属することになる。雲鶴八掛、図案化した福・寿・康・寧の字を中心に花卉文様を構成した類などは嘉靖にはじめられた文様といえよう。黄地紅緑彩によつて、見込と側面に鯉を表わした如きがあるが、これなどは宋磁皿の見込に双魚文を表わしたものと継脈があるのかも知れぬが、一応新しい類に入れてよいものであろう。

以上嘉靖磁の主な装飾法について瞥見したに過ぎぬし、また他にも種類は数多くあろうがともかく、これらは一応嘉靖装飾の代表的な在り方を示していると思うので、概略をまとめておこう。

大別すれば先ず器物全体を唐草・雲竜などで飾ったものと、主文様を

描き、簡単な幾何文様、蓮弁などの附随文様で飾ったものがあるのはいずれの時代にも見られる通りである。前者では従来の装飾法をそのまま承けついだものとしての一つの在り方を示しており、後者では附随文様でも以前からあるものではあるが、雲形・瓔珞文を用いた複雑な文様、幾何学文様地に窓を設けたものなどあるし、その主文様の題材・表現、あるいは附随文様との組合せなどにいろいろあつて、そこに新しい装飾が産れているのである。

主文様に雲竜・鳳凰・唐草などを描いた類は附随文様も主に、従来からそれらに添えて扱われていたような蓮弁や簡単な幾何学文様を施しており、いわば伝統的なものといえる。

主文様に雲鶴など表わし、附随文様に元代に見られるような雲形・瓔珞・蓮弁を施した類、明初磁にまみ見られる幾何学文様地に窓を設けた文様を附随文様とし、主文様に寿木などを描いた類の如きは、従来の絵らしい附随文様と新しい主文様を組合せた類と解せられる。

他に嘉靖からよく見る文様、例えば玉取獅子・文字などその種類も多いが、これらで飾ったものは一応新様の装飾と見られる。

即ち言うまでもないことながら、伝統的なもの、伝統と新様を組合せたもの、新様のものに分けられ、第二のものが中心をなすように思われる。しかしそれらの表現というか、絵付の態度に於て一つの共通した性格が窺われるのである。これは明初から嘉靖ついで万暦へとの陶磁装飾の性格の推移を物語る一つの主要な事柄と思われるし、更に、嘉靖磁の中に於ける金欄手装飾の意義、あるいはその現出とも何らか関連あるようににも思われるので述べておく。

明初から嘉靖以前のものにはその構図に、回転性・繞旋性といった表現法が窺われるのである。明初あるいは元といわれる東京国立博物館の魚藻

文壺は（挿図8）、左右

からの水藻をそれぞれつなげば弧を描き、しかもそれが球面によくまつわりつくよう表わされているのが注目される。宣徳あるいは宣徳以前の作と見られる蓮花文盤（挿図15）は見込の蓮は茎が巧みな曲線配置によって真中の花を中心に上・左・右に円を描きつつ繞旋するかのような構図をとり、周囲や口縁の唐草・波涛文も左から右へと回転するよう表わされ、各文様異質のものながら回転性と曲線のリズムの調和によってまとめられている。瓜蔓

挿図15 明初青花蓮花文盤

挿図16 明初青花瓜蔓文盤

文盤（挿図16）も明初のものであるが、土から瓜のはえた図を描きながらも、つるの先をつなぐ時は、瓜果を中心として静かに回転するようであり、宣徳のものでも

桃双鳥図大皿（挿図17）の如く、一方の鳥の尾端から頭、他の方の頭から尾端へと、皿の中心を通ってS字形をなし回転的な動きが窺われるのである。これら二、三の例はいずれも円形内に構図するためあつて回転性が強調されているのであろうが、明初の草花盤（挿図18）などは円形ながら特に回転性は見られない。しかし草の先端が空白を置きながら他の草なり、木の一端へとつながり、これが次から次へと連絡され、前例のような構図の場

挿図17 青花桃双鳥図大盤「大明宣徳年製」銘

挿図18 明初青花草花図盤

合に共通する繞旋的な
曲線のリズムの支配に
あるのが感ぜられる。

宣徳唐草の壺も、普通
染付の色や、雄渾な表
現によって賞されてい
るが、唐草の器の胴に
繞旋しつつ周囲を回轉
する構図、描法の巧み
さも挙げられるべきも
のである。

こうした点は成化に
も見られ、蓮池文壺の

如きは蓮や、草花が壺の曲面にびったり密着して繞旋し、胴をめぐる
廻転している。弘治銘のある染付蓮池竜文盤（挿図20）、正徳銘の染付竜
唐草文盤などにもそれが看取出来る。前者は竜とその周囲を描いた水草
に廻轉的なリズムが窺われ、後者は唐草の地文と中心の竜の手、足の動
きに曲線関係が巧みに表わされているのである。

嘉靖になると、このような表現は影をひそめるに至っている。魚藻文
壺（挿図8）は前出の明初あるいは元といわれるものと、図様など大分
異なるにしても、水藻などの曲線の扱いや、水泡などの配置にも以前の
ような感覚はなく、全体としても繞旋性や、曲線のリズムによる支配は
見られず、そこには色彩の華麗さとともに魚の強い表現が中心となって

挿図19 青花蓮池文壺「大明成化年製」銘

いる。また紅地黄彩竜
文壺（挿図21）でも動
的表現は強くなってい
るが、前のような韻律
的な趣は見られないの
である。

更に方壺や角皿に於
てはこれが顕著でその
形の故もあるが、回
転性は勿論、曲線のリ
ズム的な構成も窺われ
ず、たとえ従来と同じ
モチーフのものを扱っ
ていても、その絵付態
度は全く違ったものと
なっているのである。

嘉靖磁の装飾は、一
面従来から長く続いた
回轉性とか、まつわり
つくような感じの表現
に重点をおいた曲線構成の優れた装飾法がくずれた時ともいえるであろ
う。この傾向は万曆に至っていよいよ濃くなり、いわば模様は色彩の場
となり、雄勁な描法と共に色彩効果が装飾模様を支配するものになって

挿図20 青花蓮池竜文盤「大明弘治年製」銘

挿図21 紅地黄彩雲竜文壺

しまうのである。^{註三}しかし、こうした流の中にあつて、嘉靖の装飾は一面には、赤絵あるいは雑彩の新しい技法を産み出し、その見事な色彩とあいまつて、方壺などに殊に顕著ないわば平面角形を対象としたような、従来とはまた行き方をかえた装飾を現出し、華麗な花を咲かせたところに一つの大きな意義があるといえる。殊に金欄手は金を加え、且つ球面や、円形に特に適するというわけでもない幾何文様を地文として大きく扱う装飾法も、こうした傾向の中にあつてこそ生れ得たものなのであるう。

さて金欄手瓶の意匠についてみようと思うが、瓶には瓢形が最も多く、これに丸形のもの、上部を丸く、胴を四角にしたり、全体を六角、八角に面をとつたものがあり、また下蕪形のもの、あるいは人間に型どつたものなどもある。これらの中で優作と称せられるもの数点を採り上げ考察することとする。

寿字人物文瓢形大瓶（原色図に掲げたもの） 高六二・八釐、口径六釐、胴径三〇・六釐、底径二〇・五釐。上部は丸く、胴は四角で入角となつており、底の一部を除いて釉薬をかけ、色絵金彩を施している。上部には花形の四ヶの窓を設けて中に獅子に牡丹を表わし、地は細かな七宝繫文とし、花文などをその間に散らし、胴との間のくびれの部分には牡丹唐草・蓮弁文を施している。胴の肩には四つの丸文を置いて、それぞれに福・寿・康・寧を一字ずつ入れ、地を万字だすきとして花文を配する。胴には四方とも箆目文に窓枠を設け、竹林に人物と思わせる図を表わし、裾には一種の蓮弁文をめぐらしている。赤を主調に、緑・黄

などでいりどり、上下の窓枠内及び、くびれの部分と頭の文様、上部肩の文字、頭・裾などの帯線に金彩を施しているが、金はかなり剥落して文様の判明しない部分が多い。底裏は普通瓶では釉薬はかけず、銘の無いものが多いが、これは中心だけに釉薬をかけ、釉下に嘉靖の碗、皿などによくある染付で角に「富貴佳器」の四字銘がある。その左肩露胎の部分に「国寶流通」の墨印が押してある（挿図22）。

金彩の剥落は多いが、しばしば見るような補修もなく、かえつて古格を加え、堂々として絢爛たる趣をみなぎらせている。これは大きさ、作において、金欄手の中でも殊に優れたものの一つといえる。

寿字牡丹唐草文六角瓢形瓶（挿図23）、高二八・五釐、口径二・八釐、胴径一五・二釐、底径八・五釐、六角瓢形の上部ふくらみの各面を一種の箆目地として、真中に赤丸を置き中に図案化した金の寿字を入れ、四隅には金彩の雲形を配している。下部ふくらみの各面は万字襷地に赤丸をおき、牡丹の如き花文を入れてある。頸は赤地に雷文帯をめぐらし、くびれの部分はその上下を渦巻と一種の蓮弁帯でくくり、中には赤地に金で豊かな牡丹を飾っている。裾には嘉靖磁によくある蓮弁文がめぐらしてある。一對あり金の保存もよく、金欄手では特に優れたものの一つとされている。

花鳥文瓢形大瓶（挿図24） 高五五・六釐、口径四・三釐、胴径二四・五釐、底径一四・〇釐、頸には瓔珞文・唐草文の帯をめぐらし、上部のふくらみは窓を設けて花鳥を描き、地は七宝繫ぎに花文を配している。くびれの部分は地を万字だすきとした、大きな鋸齒文と瓔珞文を表わし、下部ふくらみの肩は万字だすきに花文、胴の部分は地を肩と同じように

した中に大きな丸窓を設けて、孔雀・牡丹などの花鳥文を描き、裾には嘉靖磁通例の蓮弁文がめぐらしてある。随所に金の痕跡が見えるが、首先を除いては主として模様の境界などに用いられており、華麗な趣をつくっている。いわゆる胡蘆瓶では最も大きく、かつ文様の綿密な作として世に知られているものである。

寿字瑞花文瓶（挿図25）、高二九・〇糎、口径一七・五糎、底径一一・五糎、下燕形の瓶で、頸に簡略な花唐草と竜をめぐらし、胴は亀甲繫ぎ地に丸に寿字と、花文を配し、花菱形の窓二つを設けて中に金で瑞花を入れ、裾には、嘉靖磁にまま見る一種の蓮弁を施している。瓶では珍しい意匠の華麗な作である。

寿字文瓢形大瓶（挿図26）、高五五・二糎、口径四・三糎、底径一三・五糎、頸に雷文帯、上部ふくらみは七宝繫ぎ地に吉祥文、赤地に金で瑞花を表わした八稜花文をおく。くびれの部分は赤、下部の肩は万字繫ぎ地に寿字入の丸文を配し、胴は七宝繫ぎ地に装飾化した四角の窓四つを置いて金で瑞花を入れ、その間に寿の字を緑で表わし、裾には蓮弁文をめぐ

挿図22 金欄手寿字人物文瓢形大瓶（底裏）

らしている。金箔は剥落して僅かに痕跡をとどめているに過ぎないが、華やかさと重厚さを備えた作である。

瑞花文瓶（挿図27）、高二八・一糎、口径二・九糎、底径七・八糎、頸に葉形をめぐらし、上部ふくらみは以上のものには見ない綱目文地とし、大小の丸文を置き瑞花を金で入れている。くびれの部分は赤地に金の唐草様の瑞花、下部ふくらみの肩には靈芝雲と吉祥文を描き胴の各面は万字だすき地に八稜花文の窓を設け、その中を更に飾り、赤地に金彩で瑞花文を表わしている。文様の種類も多く、やや複雑ではあるが、気

の利いた意匠といえる。富貴佳器の銘がある。

さてこれらの金欄手瓶には共通した特色は、赤を主調として金彩をほどこしてあることはいうまでもないが、器体の大部分を幾何学文様で埋め、そこに丸・花形などの窓を設ける装飾を行っているのも注目される。

陶磁器に金彩を施すことは既に隋・唐の彩色俑に見られ、宋には定窯の白磁・黒磁に金彩で草花文を焼付けた佳器があり、また建盞風の天目

挿図23 金欄手寿字牡丹唐草文六角瓢形瓶

茶碗には寿山福海の文字や、詩文を書いたものがある。ついで文献を見ると陶説にも引用しているが格古要論卷之七、古饒器の項に「元朝焼小足印花者内有枢府字者高 新焼大足素者欠潤 有青色及五色花者且俗甚 今焼此器好者色白而瑩最高 又有青黑色餞金者多足酒壺酒盞甚可愛」と

あり、恐らく同書の著された明初には、瑠璃に金彩のあるものがあつたと解されるのである。^{註四}

遺品では、イスタンブールのトプカプ故宮博物館に宣徳銘のある金欄手と見られる仙盞瓶があるという。もとトルコの王宮に伝わったもので、写真で見ると、全面に瑠璃釉がかかり、胴に嘉靖の金欄手仙盞瓶と同じようなハート形の精巧な竜雲の透彫文を貼つけ彩色が施してあるらしい。ただこれに金彩があるかどうか適確には分らない。形は普通の嘉靖仙盞瓶より端正で、蓋や把手にやや違いがあるとしても、どう見ても金欄手の仙盞瓶の類と見られるものである。^{註五} しかも宣徳の銘があり、そうとすれば他に類のない貴重なものとして注目せざるを得ない。陶説卷六説器下明器に「……亦有餞金蟋蟀盆。……」とあり、また飲流齋説瓷

説花絵第五に「……餞金之製亦始宣徳呉梅村有餞金蟋蟀盤歌……」とあつて、いずれも清朝の書であるが、宣徳に金彩のものがあつたことを伝えているのである。元・明初にかけはその適確な遺例は今のところないにしても、金彩磁があつたと考えて差支えないと思う。金欄手の金彩の法は金箔を小さく文様の通りに切つてこれを継なぎ合せて一つの文様をつくり、箔は漆でくっつけて低温度で焼くものと思われるが、明確なこととはわかっていないようである。^{註六} 定窯の金花も同じでないと見られてはいるが陶説卷三 造法の項には「描金用焼成白坏。上貼金過色窯。……」と「金花定盃用大蒜調金描画。再入窯焼永不復脱」とあり、定盃の大蒜というのはにんにくと解されるので金を貼るのは漆でなかったのかも知れず、嘉靖の金彩は定窯の法をそのままうけついだものかどうかはなお考慮の余地があるのであらう。

挿図25 金欄手寿字瑞花文花瓶

挿図24 金欄手花鳥文瓢形大瓶

次に文様は、金彩では人物図のようなものもあるが、多くは牡丹花の如き瑞花が表わしてある。それらには宣徳の青花に見られるものを複雑化し、華麗に仕立てたと思われるもの、あるいは金欄の牡丹唐草とよく似たものなどもあるが、^{註七}いずれにしても剝落があつて元の姿がはっきりと分らない場合が多く、それらとの関係についても簡単にはつかみにく

挿図27 金欄手瑞花文瓢形瓶

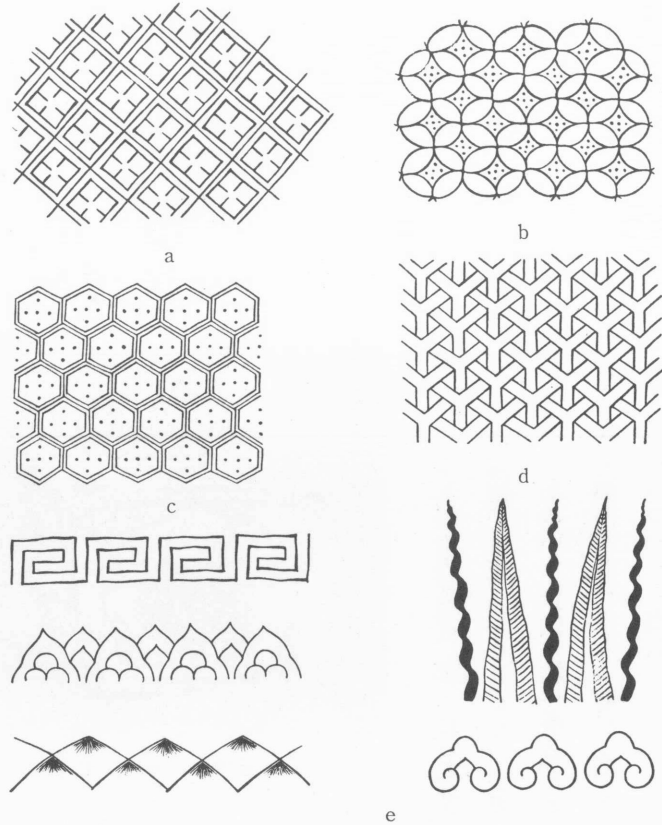
挿図26 金欄手寿字文瓢形大瓶

いのである。

地文様をなしている幾何学文様の類は金欄手瓶に用いられているのは大体挿図28の如きものである。a、dは地文様でeは帯文様に用いられているものであるが、aは元乃至明初に用いられており、b・cは宣徳の鉢などに飾られ、dは嘉靖以前にもあるのであるが、嘉靖頃からのものにしばしば見うけるのである。eの類は大体のものが元乃至明初から見られる。これらの文様は、嘉靖では青花、色絵の類にもよく用いられており、金欄手でも瓶以外の仙蓋瓶、鉢などにはやはり同じものが飾っており、金欄手に於て特に従来の幾何文様とは変つたとか複雑化したものが用いられているわけではないといえる。しかし、従来の場合にはそれらの幾何文様は、例えば壺の口外側、肩の一部、鉢・皿の縁といったところに極く僅か用いてある程度で、この点は嘉靖磁でも金欄手以外ではほぼ同様である。

さてこれらの文様を扱った装飾法であるが、幾何文様を地文に花形などの窓を設けその中に草花などの文様を入れる法は、前述の明初の青花三国志図壺(挿図6)の肩の部分や、宣徳の文房具の側面など(挿図14)余り多くはないにしても既に見られるものである。しかし、瓶のようにこの法で器物全体を飾つたものは、嘉靖以前にも、嘉靖にも他には無いのである。これは従来一部の装飾に用いられていたものを拡大し使用したと見られるかもしれないが、嘉靖磁にはそのような装飾法を試みているものも、幾何文様を装飾面で大きく取扱つたものもないのであつて、金欄手は装飾法という点で、また大きな特色が見出されるのである。

嘉靖磁の装飾法にはいわば伝統を追つたもの、部分的に変化を加えて



挿図28 金欄手瓶の幾何文様

広島浄土寺、光明坊にはそれぞれ同じような黒漆雲鳥花形戱金経箱があるが、その蓋甲及び四側面には蓮花文を地文として、中央に菱花形を画し、内に雲形に鳳凰・孔雀・尾長鳥などの双鳥文を刻してあり、共に

華麗に仕立てたもの、あるいは前述の如く曲線構成的な要素を捨てた新様のものがある中で、別種のものではあり、また従来のものの装飾の一部を引伸したに過ぎぬとも簡単には見られないようであり、その成立についていろいろな考えさせられるのである。

試みに器物全体を幾何文様で包み、そこに窓枠を設けて文様を配するものを他に求めれば先ず戱金が挙げられようし、染織品も入れられるかも知れぬ。

戱金は周知のようにわが国でいう沈金で、元・明の優れた作品がいくつかある。

延祐二年の銘がある。浄土寺には他に、これよりやや大きい、同じ様式の優れた経箱があり、紀年銘は無いが、やはり同じ元時代の作と鑑せられている。また東大寺にある大きな経箱は青漆地に蓋甲と四面に各菱花形を画し、内に雲と飛鳳凰を表わし、地は格子に雲形を配したもので、明代の製といわれ、彫法も勁拔で優れている(挿図29)。その他明代のものとして、朱漆地に各面縁枠文様を施し、内に雲竜を彫った大内氏の旧物という印箱、黒漆地に花木に小禽を配した手箱などがある。^{註八}

これら戱金と金欄手の文様を見るに、器物全体を幾何文様でうめ、中に窓を設ける装飾法、挿図23の瓶のように縁取した各面の四の四隅に雲

挿図29 青漆戱金雲鳳文経箱

形を置いたのと、東大寺経箱のそれとの類似、あるいは陶磁に於ては金欄手・法花によく扱われる孔雀が、これらの箱ではほとんど用いられていることなどが目につく。

また善隣国宝記の、宣徳八年六月十一日明王から義政への贈答品中に、餞金の轎、椅などと共に、硃紅漆餞金碗、式拾个、裏金黒漆、餞金碗、式拾箇などがあり、現存品はないので明らかではないが、陶磁の金欄手碗も連想してみたくのである。餞金と金欄手とは共に金を扱いながらその技法は全く違ひし装飾法も前記の程度であつて、直接的な密接な関連を求めるのは困難であろうが、何らか関連が求められないこともないようには思われる。

一方、明初の格古要論巻七、古窑器論、彭窑の項に元朝に餞金匠彭均宝が古定器に倣つた焼物を造り、彭窑と称したという記載がある。^{註九}彭均宝は、格古要論に元朝嘉興府西塘に彭君宝と称する餞金の名手がいた由を伝えており、^{註一〇}この彭均宝もそれに関係ある漆芸の餞金工であつたと思われる。彭窑がその手になるとすれば、恐らく金彩があつたのではないかと想像されるが、この記述だけでは詳細なことは分りにくい。ともかく元には餞金の製作者が焼物の仕事にたずさわつたことはいえる。

明代にもそうしたことが行われたかどうかは確かな資料もないので明らかに出来ないが、陶説その他の陶書で、金欄手を餞金と称しているのが注目される。餞金の法は輟耕録にもあるように、本来漆面に針刻の文様を施し、漆を擦り込んで金箔を置き、刻線の中にはめ込んでそこだけ金箔を附着させ、金線で文様を現わしたもので、輟耕録では鎗金といひ、^{註一一}格古要論には餞金と記し、髹飾録には、「鎗金 鎗或作餞或作創」^{註一二}とある

が、鎗も餞もきずつけることを表した同意語であり、いずれにしても餞金は漆芸に於ける一つの名称である。いま陶説は清朝の著ではあるが、中国の陶磁専書として最も古く、その内容からいっても先ず信用されているものであり、餞金の語も誤用とは思われず、恐らく、以前から陶磁に於ては既用されていたのによると見られる。従つて金欄手について技術的にも異なる漆芸の餞金という語を用いている点、そこに何か両者関連があつたのを物語っているように思われるのである。

これら文様・文献などの上から見て、金欄手と餞金の間には何らかの関係があると見られるようであるが、そうとすれば、金彩ということも含め、やはり幾何文様で器を包み文様を配する金欄手特有の装飾法の成立には餞金の装飾法と関連するものがあるように考えられるのである。

染織品に関しては、金欄手の金彩の文様中に、室町時代わが国にもたらされた明の金欄の牡丹文様とよく似たものもあり、^{註一三}相互の関連も考えられるのであるが、前述の如く金欄手の場合には剥落があつたり、あるいは後金と思われるものなどがあつて、文様を詳細に知り得ぬうらみもあるもので、ここでは一応差し控えることとした。

以上推測にすぎぬが、華麗な嘉靖磁を知る上にいささかでも参考になるところがあれば幸に思う次第である。

註

- 一 小山富士夫「嘉靖金欄手」陶説一〇七など参照
- 二 尾崎洵盛「明代染付と赤絵」明代の染付と赤絵、日本陶磁協会編 拙稿「嘉靖万暦の模様」世界陶磁全集 元明篇
- 三 同右参照
- 四 陶説ではこれを巻三饒州窯の項に引き明初の窯のものと解しているが、巻五元器

の項では元朝として扱っている。

五 小山富士夫「嘉靖金欄手」陶説一〇七

六 内藤匡「古陶磁の科学」

七 室町時代移入されたと思われる明の紹地金欄などに金欄手の金彩の牡丹に似たものがある。日本染織文様集Ⅱ一四四図の一、一四五図の一参照

八 吉野富雄「戔金名器録」漆と工芸四二二・原田淑人「元代戔金経箱の銘文に就いて」東洋学報二九卷三・四号参照

九 格古要論卷七 古窑器論 彭窑の項、元朝戔金匠彭均宝效古定器制折腰様者甚整齐故名曰彭窑土昧細白者与定器相似比青口欠滋潤極脆不甚直錢 壳骨董者稱為新定器好事者以重價収之尤為可咲

一〇 格古要論 卷八 戔金 戔金器皿漆堅戔得好者為上 元朝初嘉興府西塘有彭君宝者甚得名戔山水人物亭觀花木鳥獸種七臻妙寧国府今有描金器皿兩京匠人亦多作之

一一 輟耕録 卷三〇 鎗金銀法の項

一二 註一〇参照

一三 註七参照